

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者 氏名 小松 史生子

論文題目 探偵小説のペルソナ 奇想と異常心理の言語態

小松史生子氏提出の博士号請求論文（乙）（論文博士）「探偵小説のペルソナ 奇想と異常心理の言語態」（双文社出版 2015年2月25日刊 A5判/288頁 として刊行）は、近代日本における探偵小説のジャンルの生成と展開を、明治から大正にかけての翻案作品の成立から説き起こし、大正末から昭和前期のモダニズム都市文化、第二次大戦戦時下から戦後への言説変容との関わりにおいて、複数の作家の言語態の分析をとおして跡付けた研究である。

近代文学研究における探偵小説の研究は、過去十年ほどの期間に、文化研究やカルチュラル・スタディーズ、読者論、メディアミックス研究などの方法論の導入によって、テキスト分析の新たな展望が開拓されてきている。作家論を中軸にした、作家の作品をめぐる書誌学、書誌調査に基づく単線的な探偵小説史の執筆とは一線を画した姿勢で、探偵小説を時代のコンテキストに位置づけられた言説場の様態として理論的に検証する研究が試みられてきている。

本論文は、そうした言語態分析の近年の学的展開と歩みを同じくし、探偵小説テキストにおける「ペルソナ造型」の問題系を、テキストが書かれた当時の言説コードと照応しつつ、探偵小説というジャンルの葛藤、想像の共同体や情緒共同体に属する読者の「期待の地平」との関係、〈作家〉の恣意性の創発として描き出そうとするものである。

小松氏は、探偵小説における「ペルソナ問題」を、江戸川乱歩の有名な定義「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」（「探偵小説 定義と類別」『幻影城』 岩谷書店 昭和二十六年五月）が導き入れたトリックを重視して登場人物造型を軽視しがちな批評態度を相対化しつつ、〈探偵〉および〈犯人〉を恒常項とする探偵小説のディスコースの様態と志向性の歴史的形成を対象として分析を行っている。江戸川乱歩の作品群を中軸にしつつ、乱歩テキスト周縁の作家のテキストの幾つかを分析して、それらテキスト群が犯人と探偵を描く際の問題意識と表現コード選択の跡を追い、探偵小説ジャンルをめぐるペルソナ問題について考察と検証を試みている。

第一部では、「翻案コードの表象としてのペルソナ」として、主に明治から大正にかけて

「翻案」という形態で輸入された海外の探偵小説至近ジャンルに登場するキャラクターが、どのような解釈コードのもとで表象されていったかを、三遊亭園朝、黒岩涙香、村山槐多、そして江戸川乱歩の作品の分析を通して検証される。

第一章では、三遊亭園朝『欧州小説 黄薔薇』（明治二十年）が採り上げられ、作品の言説分析を通して、初期探偵小説の文体に影響した翻案言説のコードがペルソナを造型していく過程が分析される。

第二章では、黒岩涙香によるイギリス小説の翻案物『怪の物』（明治二十八年）、村山槐多『悪魔の舌』（大正四年）、そして江戸川乱歩が先行する両者のテキストを下敷きに、明智小五郎と人獣の死闘を描いた通俗長編『人間豹』（昭和九年）の三つのテキストをとりあげ、それぞれが〈人獣〉というモチーフを描く際の位相の差異に注目してディスクールの参照関係が研究されている。

第三章では、江戸川乱歩『幽霊塔』（昭和十二年～十三年）を扱い、黒岩涙香『幽霊塔』（明治三十二年～三十三年）の翻案であり、かつその涙香『幽霊塔』がイギリスのA・M・Williamsonによる『A WOMAN IN GREY』（1898年）の翻案であるという、翻案作品の再翻案化によって造型される探偵小説のペルソナの問題系が、翻案時の語彙の選択コードに注目しつつ考察されている。

第二部は、「モダニズムが煽る異常心理構造としてのペルソナ」と題され、探偵小説がジャンルとして確立していく過程において、都市のモダニズム表象の裏面で表現コードを支えた〈正常／異常〉の言説群の枠組みが、探偵小説の〈探偵／犯人〉のペルソナ対立に直結していく位相を、江戸川乱歩、横溝正史の作品の他、川端康成、堀辰雄などの同時代テキストとの交錯も絡めながら考察される。

第四章では、資料体として江戸川乱歩『パノラマ島奇談』（大正十五年～昭和二年）を中心に、雑誌『新青年』誌上で展開された「水族館幻想」へのアプローチが試みられる。明治から大正へと繋がる想像の共同体の作用を俯瞰して、昭和モダニズム文学の範疇としての探偵小説が描き出す〈都会人〉というペルソナ造型の位相が、同じく水族館幻想を扱った同時代テキストである川端康成『水族館の踊り子』や堀辰雄『水族館』との比較において分析される。

第五章では、江戸川乱歩『孤島の鬼』（昭和四年～五年）を資料体として探偵小説ジャンルの普及と医科学言説の交錯が研究される。〈外科医〉という言葉が喚起するコノテーションが、民間医療と近代医療の狭間で重層化していた医科学言説のコードを導き出し、それが当時の探偵小説のディスクールに深い影響を与えている事実を、民俗学言説、近代医療言説の現場の資料を追いながら検証している。

第六章では、横溝正史の中期の佳作『真珠郎』（昭和十一年～十二年）が取り上げられ、「密室」を描く際に、横溝テキストが召還した社会的環境に基づくリアリティについて、相馬事件の報道や東京帝国大学精神医学部教授呉秀三らによる調査資料が語る座敷牢をめ

ぐる言説を考察、さらにそうした社会的環境に依るリアリティの補填に加えて、雑誌『変態心理』（大正六年創刊）などが普及させたフロイト精神分析が探偵小説のトリックとして利用されていることを分析している。

第三部では、探偵小説ジャンルの文体が、第二次大戦の戦時下及び戦後において、どのようなディスクールでテキスト内のペルソナ造型に取り組み、その造型にどのような問題意識を込めていたのかが、小栗虫太郎、横溝正史、戦後の江戸川乱歩、高木彬光の作品を対象に考察される。

第七章は、小栗虫太郎『紅軍巴蟻を越ゆ』（昭和十四年）を分析対象に挙げ、小栗の〈密林〉の文体とペルソナ造型が、戦時下のメディア言説の位相から再検討に付される。

第八章では、横溝正史『本陣殺人事件』（昭和二十一年）の分析を通して、戦後文学としての〈本格推理〉が論じられ、この〈家を巡る物語〉が、「たたずまいとしての家」をテーマ化しているとして、戦後の住宅事情と〈密室〉モチーフの相関性について、戦後の身体と家屋にかかわる文学状況を参照しながら、プライベートを問うペルソナとして検証される。

第九章は、江戸川乱歩の戦後の活動と実作の激減という事態を、経済幻想をめぐるナラティブの観点から『影男』論として考察している。『影男』（昭和三十年）は明智小五郎が登場する最後の通俗長編であり、この作品において〈犯人〉と〈探偵〉はもはや対幻想としないこと、明智小五郎というペルソナの消失を受けて、その断絶の後継として高木彬光『白昼の死角』（昭和三十四年）というコン・ゲーム小説の犯罪者のペルソナが造型される過程が分析される。

以上のように、小松史生子氏の論文は、近代日本文学における探偵小説ジャンルの生成と展開を、第一部の翻案の時代、第二部の昭和モダニズム、第三部の戦中から戦後の時局から高度成長期にいたる、ジャンルの生成、その構造と転位を跡付けることで描き出した労作である。

論文審査委員会においては、探偵小説ジャンルの考察のための理論的縦糸となる「ペルソナ」概念の多義性をめぐって、演劇におけるペルソナ概念との関わり、文化人類学や精神分析における人物類型との関連、ナラトロジーにおける登場人物の機能化との相関などが指摘され、ペルソナ概念の理論的総合の必要性が今後の理論的課題として指摘された。

探偵小説の読者共同体をめぐっては、小松氏のいう「情緒共同体」と「想像共同体」との区別が議論され、探偵小説ジャンルの「通俗」性の問題と文学の受容理論のいう「期待の地平」との関連をめぐって、「通俗コード」とメディア媒体の編成との相関も議論された。

小松氏の論述の過程で、「言説コード」や「メディア記号」といったメタ概念が、文学言説と他の諸言説との関係を理論化する手掛かりとなっていること、文学研究において文学

テキストを文学以外の諸言説との関係から読み直す「ニュー・ヒストリシズム」的方法との類似など方法論についての議論も行われた。

これらはいずれも、小松氏の研究が、従来の文学研究の枠組みを超えて、言語の動態としての「言語態」研究として遂行されたことによって、新たな問題系が顕わにされ、理論的な力線が浮かび上がった結果であるとの評価が与えられた。

結論として、本審査委員会は、慎重審議のうえ、小松史生子氏の論文「探偵小説のペルソナ 奇想と異常心理の言語態」が、日本近代文学における探偵小説のジャンルの生成と構造の言語態研究として、これまでにない独創的で高い学術的価値を有し、小松史生子氏に博士（学術）を授与するにふさわしい優れた研究であることを全員一致で認定するにいたった。